

令和 4 年 6 月 22 日現在

機関番号：24201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K13994

研究課題名（和文）Narrative Inquiryによる 若者支援 実践の深化と専門性の探究

研究課題名（英文）What is the expertise in youth work? : Using the Narrative Inquiry

研究代表者

原 未来 (HARA, Miki)

滋賀県立大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：90760603

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、実践におけるナラティブを様々な角度から解釈し、理解を深める Narrative Inquiry (NI) と呼ばれる方法を若者支援領域に援用することで、若者支援実践がどのように深化し、またそれにかかわるスタッフの専門性とは何か、明らかにすることを試みた。若者の主体性・能動性への着目が強化されるなど、若者支援にNIを援用することの意義が明らかになると共に、スタッフの協同的検討・反省的思考など、実践において重要となる観点が見出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

若者支援は、福祉・教育・労働など様々なバックグラウンドをもつ人々によって担われてきた。そのため、若者支援の専門性や重要となる観点については議論が拡散しがちで、研究蓄積も乏しい。そのなかで、本研究が見出した知見には一定の意義がある。また、NIを用いて現場実践者と共に実践を語り合うなかで専門性を言語化する過程を導出したことは、どのような領域にも援用できる可能性が高い。

研究成果の概要（英文）：In this study, I attempted to clarify the process of deepening youth work practice and the expertise of the staff involved in this process, using a method called Narrative Inquiry (NI) which interprets narratives in practice from a variety of perspectives. The significance of using NI in youth work was shown, such as by focusing on the autonomy and activeness of young people who are the target of support. Cooperative examination and reflective thinking by staff are important in youth work.

研究分野：教育学

キーワード：若者支援 Narrative Inquiry ひきこもり

## 1. 研究開始当初の背景

1990年代半ば以降、若者の生活上の困難が広がるなかで、各地で支援活動が展開されてきた。教育・福祉・労働など多様な領域で実践が展開され、実践紹介や報告等は蓄積されつつあるが、支援実践に関する学術的な研究・分析はいまだに十分とは言えない。若者支援実践に必要な視点やその専門性が学術的に蓄積されておらず、また、それら研究成果が現場に有機的に還元されない現状がある。

そこで、本研究では実践におけるナラティブを様々な角度から解釈することによって実践に対する理解を深める Narrative Inquiry (NI) という教育実践研究方法に着目した。NI は主に学校現場で用いられてきたが、研究者と実践者の協働を推し進め、自らの実践を探究できる教師養成への視点も保持している点に特徴がある。学術的蓄積が乏しく、専門性の体系化と実践者育成が望まれる若者支援領域において、NI は、実践深化・実践者育成という現場課題と、それにかかわる諸要素の解明という研究課題の両者をつなぐ方法論になりうるため、若者支援への援用が有効だと考えた。

## 2. 研究の目的

研究の目的は下記の三点とした。

1、NI による若者支援実践の深化・変容の過程と、その深化の核として捉えられる要素を明らかにすること

2、実践深化とかかわる若者支援の専門性について、実践者が言語化・意識化・身体化する過程も含めて明らかにすること

3、若者支援に NI を用いることの意義と課題を明らかにすること

## 3. 研究の方法

本研究では、若者支援実践をおこなう団体と定期的・継続的な NI を実施した(2ヶ月に1回程度)。NI では、具体的な実践場面における若者のストーリーを検討する作業から開始し、参加者の多様な視点からストーリーを探究していく過程を創出した。また、長期間 NI に参加した実践者への聞き取りをおこなった。これらデータを蓄積し、分析をおこなった。

## 4. 研究成果

### (1) 若者の思いや経験を捉える視点の深化

NI では、J.デューイの経験概念を下敷きに、人はストーリーを語り生きる存在だと捉える。たとえ言語化されなくても、その人なりに生きようとする自己のストーリーがあり、言動や作品などからその人のストーリーを探究していく。NI は人々の経験を「重層的かつ積極的に捉える方法」とも言われる。本研究では、当人の体験してきた出来事を並べ、それを当人がどう関連づけたり意味づけたりしているのかを確認する作業を通じて、どのような自分でありたいと本人が感じていると思われるのか、現場スタッフと探究していく形態をとった。

結果、若者の多様な思いや経験を支援者が捉えていく過程が生み出された。無葛藤に見えていた若者が家族役割を負いながら生きようとしている姿や、就労への動きが停滞しているように思われていた若者の意味ある内省プロセスが見えてくるなどの事例があった。これらは、NI によって若者自身を主語にした捉え方が促進された結果である。NI による検討

は、一見理解しがたいように思える若者の様子に対し、若者の視点に立った発見や検討を可能にし、若者の主体性や能動性に注目させる。それは、印象論的な見方を排していくことにもつながる。こうした若者理解の深まりが、日々のかかわりや実践の方向性検討、ひいては実践深化・変容に影響することが見出された。

## (2) 若者支援における二つの実践局面

NIを援用しストーリー概念を導入することで、若者支援実践を **かかわりの実践** と、**ストーリー形成を支える実践** の二つの局面に分けて提起した。

前者の **かかわりの実践** 局面は、若者がかかわってもよいと思える他者や場になっていくことで、双方向的な関係を形成していく段階だ。かかわりを忌避する若者に対しては特に、かれらがどのようなストーリーを生きようとしているのか探究することが、相互的な関係構築へと至る回路になる。この局面は従来の実践や研究ではほとんど注目されてこなかったが、初期の実践プロセスとして重要であることが示された。

また、関係が定着した後は、若者が新たに生きようとするストーリーの形成をどのように後押ししたり支えたりするのかということに実践の焦点が移っていく。これが **ストーリー形成を支える実践** 局面である。その際、どのような(what)ストーリーを形成するのかという点に支援者が注力していくことは、「よき生」の押しつけとなる危うさを孕む。そのため、力点は若者のストーリー形成・再形成をどのように(how)支えるのかという点にある。新たな体験を増やしたり、新たなストーリーを共有する場や他者を広げていく実践が、新しいストーリーをつくりだし確かなものにしていく過程に不可欠であることが見出された。

以上のように、ストーリー概念に依拠することで、若者支援の各局面において支援者は「何を」するのか、その仕事や専門性の一部が明らかになった。

## (3) 実践者が自らを語ることの意味

若者の生きようとするストーリーを探究することが重要な意味をもつことを示したが、他方でそれは、実践者自身が生きるストーリーを検討することを余儀なくさせる。目の前にいる一見理解しがたいふるまいをする若者のストーリーを捉えるためには、ときに支援者自身のもつ価値観や生き方を問いなおさなければならないからだ。

また、若者が新たな生き方やストーリーを形成・模索する過程に積極的にかかわっていくことが若者支援だとすれば、それが支援者側のよしとする生を押しつけるものに成り下がらないためにも、支援者側のストーリーや生き方が問われ変更される余地が担保されていなければならない。

以上から、若者支援におけるNIでは、若者のストーリーを語り捉えるだけでなく、かれらにかかわる実践者が自らのことを語り、語りなおし、生きなおしていく過程が不可欠となる。こうした自らのあり方を問いなおす内省的・反省的思考は、支援者の専門性の重要な観点として位置づくだろう。

なお、本研究では若者のストーリー検討と、それにかかわる実践深化やスタッフの専門性という観点に焦点が集まりがちで、実践者自らのストーリー変容に十分に注目した検討はおこなうことができなかった。今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 原未来	4. 巻 -
2. 論文標題 不可視化された低層孤立者の経験と 若者支援	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 首都大学東京大学院 博士論文	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 平塚眞樹、横井敏郎、南出吉祥、原未来、乾彰夫、岡幸江
2. 発表標題 若者支援実践の専門性を支える社会的環境
3. 学会等名 日本教育学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 阿比留久美、岡部茜、御旅屋達、原未来、南出吉祥	4. 発行年 2020年
2. 出版社 かもがわ出版	5. 総ページ数 197
3. 書名 「若者 / 支援」を読み解くブックガイド	

1. 著者名 若者支援とユースワーク研究会編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Kindle版, amazon.com	5. 総ページ数 -
3. 書名 若者支援の場をつくる	

1. 著者名 原未来	4. 発行年 2017年
2. 出版社 認定NPO法人文化学習協同ネットワーク	5. 総ページ数 6
3. 書名 別冊 はたらく人への若者インタビュー帳	

1. 著者名 原未来	4. 発行年 2017年
2. 出版社 公益財団法人京都市ユースサービス協会	5. 総ページ数 114
3. 書名 若者の成長におけるユースワークの価値	

1. 著者名 原未来	4. 発行年 2022年
2. 出版社 大月書店	5. 総ページ数 280
3. 書名 見過ごされた貧困世帯の「ひきこもり」 若者支援を問いなおす	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------